

## 志摩の出家

赤 檣 の 山 人

志摩智朗は僧侶に爲ると間も無く、松ヶ枝小學校に來たのであつた。其の直ぐ前まで、函館商船學校に入學してゐた。商船學校の卒業旅行は、海外貿易見習いだそうで、彼は同級生全部と一所に、何丸さかに乗つて、上海や香港は無論のこと、南はシンガポール、ボルネオ、北は浦鹽、ニコライエフスク邊りまで、半年も航海を續けて、やつと馬關に無事に入港したが、彼は何思ふたか獨り瓢然として無斷で船から上つて、其の邊りを無茶苦茶に歩き廻つて、遂に萩に行つて、其處の法華寺に頼んで、弟子と爲つて終つたところであつた。

何故、志摩が、突然船から上つて、世捨人に爲つたか。何故馬關に上陸したか、其れは明瞭には聽か無かつた、然し糸月が、彼から折々聽いた談を綜合すれば、略それを察せられる邊はある。

志摩は、東北の或市の生れであつた。其所は、美人系として有名の場所である。彼には、隣人どうしの幼昵みの愛狂しき娘があつた。兩人は物ごゝろが判る様になつて、一層に愛し合つてゐた。彼が商船學校にゐる間に、何時しか、娘はすっかり體が出來上つて、美しさも一倍になつて來た。志摩の心は速つてゐた。

所が、志摩に取つて、愕くべき、哀しむべき事が、突然に起つて來た。娘の家は志摩の家程富んでゐなかつた。娘の親は、何等兩人の心を察する所は無かつた。或は、それ程深い事情を知る由も無かつたのかも知れぬ。無邪氣で、人の好い娘は、急に談が進んで、土地出身の或高等官の妾に賣られて、遠い山陽の果の、或地の某官舍近くに、圍はれの身となることに決つた。

志摩は、世もあらず驚き悲しんだ。然し十八、九歳の學業中の彼に、如何ともする業は無かつた。從順な娘は、無論親に反抗する様な自覺心を持つ筈はなかつた。

汽車の無かつた東北の旅を、娘は一人寂しく俚に乗つて、遠き西の空を指して出立した。志摩は、秘密に、娘を送り／＼、幾夜を重ねて、遂に或所まで行つて、盡きぬ別れを惜み乍ら、譬へ方なき悲哀をもつて漸くに歸つて來た。それから一年餘りの月日を悲哀のうちに送つて、漸く卒業航海の旅に上つたのであつた。

志摩が、船から上つた目的は、言はずと最早卒業近くなつたから、彼女を訪れて、何とかして、郷里に連れ戻る爲めであつたらうと想像される。彼が其の附近で、其のまゝ、縁も無き寺の門を叩いて、學生姿から遽かに、緑りの髪を剃り落して、墨染めの法衣に、數珠をつまぐる哀れな姿に變つたには、更に哀れな最後の幕があつたらしく想はれる。

彼が、糸月に、此の生々しき物語りを爲す時には、彼は決して眼底に涙を宿してゐた。そうして其の聲は、いつも笑の中に泣いてゐた。彼は机の引出しから、時に短刀を取り出して、白く光る切先を、ある深い表情で眺めてゐた。

彼は後年、好きな古書の蒐集と、中古天台學系統の研究の爲め専心しつゝ、琵琶湖畔の古刹の奥まつた書院に、誰れにも知られず持病の腦溢血で死んでゐた。誠に出家の動機にふさはしい、悲哀をそゝる最後であつた。

(終り)